



TITLE:

恐慌の歴史性と失業の歴史性

AUTHOR(S):

桑原, 晋

---

CITATION:

桑原, 晋. 恐慌の歴史性と失業の歴史性. 経済論叢 1940, 51(6): 900-919

ISSUE DATE:

1940-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/131479>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十一卷 第六號

昭和十五年十二月

口繪 紀元二千六百年記念展觀會場寫眞

## 論叢

經濟變動と租稅政策……………經濟學博士 汐見三郎

中國に於ける特殊通貨としての匯劃……………經濟學博士 小島昌太郎

經濟の統制について……………文學博士 高田保馬

## 研究

恐慌の歴史性と失業の歴史性……………經濟學士 桑原晋

資本不足と過剰生産……………經濟學士 青山秀夫

丹後機業の生産構造……………經濟學士 堀江英一

## 說苑

蠶種輸出に對する思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

日滿支經濟建設要項に於ける産業分野の決定について……………經濟學士 菊田太郎

公益優先……………經濟學士 鈴木總一郎

ピグーの『戰時經濟論』……………經濟學士 有井治

## 記事

紀元二千六百年記念・經濟學部展觀

## 附錄

外國雜誌論題

本誌第五十一卷總目錄

## 研究

## 恐慌の歴史性と失業の歴史性

桑 原 晋

經濟生活は一色に發展したものでない。口に言へば、社會は共同社會より利益社會へ進化した（現下全體主義社會に於ける共同體思想に就ては姑く觸れない）。語を換へて言へば、「身分より契約へ」、血縁團體より地域團體へと發展した。即ち原始人類は自然に依存する度合大なりしたため、食物の不足が原因となつて、血縁關係者が一つの家族生活をなし、且國家組織の基礎をなしてゐたとも考へられる。しかるに、此の大家族制度は、奴隸制度及地域團體となりて、近世の小家族制度となつたに反し、地域關係は、村落・都會・地方・國家・世界にまで擴大し、それに從つて經濟生活が營まれるわけである。云はゞ始めに血縁團體としての家内經濟あり、次に非血族者をも混へた奴隸經濟においても依然として大家族制度の形態をとゞめ、「遠くの親類より近くの他人」のいみにて、同一地方住民の共同經濟を維持する爲に地域團體經濟となり、延ては中世の莊園經濟となつた。しかし此の時代までは、原則として大體自給自足經濟時代である。且つ土地依存の經濟である。しかるに中世に於て都市發生以後、地方經濟を形造りて地方的自給自足とも云ひうる經濟を行ひ、遂に國家自給自足經濟とも云ひうべき國民經濟へ

と發展した。國際經濟・世界經濟・萬民經濟などの關係は新なる形態である。<sup>1)</sup>

斯の如く、人間の自然的生命及文化的生命を完うするための物質的欲望充足をめぐる諸々の行爲、即ち所謂經濟活動の表現としての生活形式を、歴史的發展的に辿るとき、幾多の段階があることを發見するであらう。

そして其の各々について經濟生活の均衡の破れ又は攪亂、又は經濟生活の疾病と云つたものがあるだらうことは想像するに難くない。而も結局それは生産と消費との不一致又は需要と供給との不一致なる現象に歸因する。そのことを若し恐慌と呼ぶならば、恐慌は各經濟生活の發展段階に應じて存在する譯であり、資本主義時代に特有なものでないことを知る。たゞ茲では景氣循環の様相をとるを以て特徴とする。

それのごとく、失業もまた、資本主義の一大特色たるの觀を呈するけれども、資本主義に特有なものではない。經濟生活の發展段階に應じて失業現象を發見することが出来る。たゞ、恐慌と共に、資本主義の下に於ては、景氣循環と一定の相互關係に在ることを以て特徴とする。恐慌の歴史性と稱し、失業の歴史性と稱する所以である。

以下、恐慌の歴史的特徴をうかがひながら、失業の歴史的特性を検討しようと思ふ。研究の中心は資本主義時代における失業に在る。しかしながら、實踐的意圖は未來の展望に在ることは勿論である。

## 第一節 資本主義時代までの恐慌と失業

### 第一項 上古自給自足經濟時代又は封鎖的家内經濟時代における恐慌と失業

1) 拙著、經濟原論教材、二四頁。

——血族團體としての家族共產體、並に非血族團體としてのギリシア・ローマの奴隸經濟、及び中世初期におけるラテン・ゲルマン民族の莊園經濟等における恐慌の特殊性と失業の特殊性——

一般に自給自足經濟時代 (Bücker は特に封鎖的家内經濟時代と稱す) に於ては、經濟單位は家族であり、云はゞ原則として家族の生産は家族の消費的欲求にもとづいた。勿論原則として生産と消費との媒介は家族員によつてなされ、他の經濟單位との依存關係も絶無に近かつた。

例へば、血族團體經濟としての家族共產體經濟の如き、或は非血族團體經濟としてのギリシア・ローマの奴隸經濟や、中世初期に於けるラテン・ゲルマンの莊園經濟の如き、所謂自給自足經濟に在りては、生産は凡て自己生産 (Eigenproduktion) にして、生産者と消費者とは常に同一人にして、生産は單に消費財の生産に限られ、而も自ら消費せざるものは生産せず、自ら生産せざるものは消費する能はざるより、通常平年は生産と消費との間には不平均が起らなかつたと一應は考へられる。又相互扶助的交換も餘剩物交換 (物々交換) も無きため、一方に在りては欲求品缺乏するに反し、他方に在りては餘剩を呈する事實も亦考へうる (茲に新な特殊の交換即ち相互扶助的交換が行はるゝこととなる)。

加之、生産は家内の需要消費により左右せられ、又營利を生ぜしむる交易なき此時代に在りては、家計のみが重要意義を有し、従つて消費の難易が中心の問題となつておられ、而も家計は大體土地に依頼して行はれたので、經濟外的原因就中天變地異 (旱魃・洪水等) 等の自然的原因より家計が攪亂さるゝ場合が多かつただらうことは明かであり、而も此の攪亂たるや、多くの場合生産不足であつたと考へられる。何となれば、一方、原始人類

は大體、「必要に生きる」生活即ち衣食住共に必要品の自給を以て満足する自然狀態であり、年々の家計は正常年を以て標準としたと考へられるのに反し、他方、自然への從屬依存的經濟は屢々自然力に煩はひせられたらうと考へうるからである。従つて此の時代の恐慌は家計恐慌又は消費恐慌と呼べるべき性質のものであり、且つ偶發的であり局部的であつた。<sup>2)</sup>

クムプマン<sup>3)</sup>の表現を借りるまでもなく、古代に於ける勞働の經濟的性格と倫理的評價とを知つてゐる人は、當時の失業は集團現象として現はれなかつたことは直ぐ分る事柄である。到る處農業が給養源として重きをなし、農業は其本性上中産階級及びあらゆる民族部分の十分なる扶助を充たして呉れた。肉體的勞働は出來るだけ奴隷に委ねられたので、恰も家畜に於ける如くで失業があつても社會問題とはならなかつた。若し奴隷が勞働不能であれば、保護の義務はないから、人々は何等かの方法で其義務から免れねばならなかつた。萬一の場合には放逐された。しかし自由勞働者或は手工業者も、その行爲が奴隷に似て居り、一般に同情と扶助とを必要とするのみならず、輕侮と壓迫とを豫期せねばならなかつた。

ギリシア・ローマ時代から多くの政治的政策は失業の視點から考察された。しかしその場合、勞働の調達は何時の場合でも第二義的に考察さるゝにすぎなかつた。人は一方人口過剰と勞働不足を説明するために、ギリシア及ローマに於ける植民的發展の衝動を指摘する。大掛りな公共勞働は集團勞働とパンとを與へねばならなかつた。アテネの建築術の支配が最盛時に在る時は、人口の各層に浸透して満足な狀態におかれた。公共的救恤政策も失業處置と見ることが出來た。基督紀元五世紀頃のアゼンスに於ては、全人口の半分は國家の救恤人口であつ

2) 拙著、資本主義と景氣循環、二四、二五頁。

3) K. Kumpmann, „Arbeitslosigkeit und Arbeitslosenversicherung“ im H. D. S. 4, Aufl. I. Band, S. 791 ff.

(註一) たらう。

ローマに在りては、土地を失つた人民が首都に集つて勞働に投じることによつて、一世紀に既に固有の

いみの「無産階級」が生じた。

(註二) ラティンディウム

大私有地經濟は常に大きく農業施設を行ひ、之を以て、恐るべき多數の資力なき然

し政治的には同権の人々の機嫌を維持した。若きグラツクス(Lex frumentaria)の「穀物法」以來穀物の給與がなされ、失業補助として作用した。ケーザルは徒らに試み、此の給與は整頓せる貧民救助を却つて墮落せしめ、常に

無形畫的に而も夥しかつた爲めに、六つの租稅階級を無料給與者たらしめた。そして帝政時代には四十萬人が國家の給與を要した。

(註一) 「アテネの帝國主義はペリクレス時代に頂點に達したと云ふべきである。又産業も盛に興り、それに伴ひ、奴隸使役の風が大に起つて來た。産業の進行と共に經濟生活も活潑となり、解放された農民は市民と同等に取扱はれた、併し一方多數の勞力を必要とする結果、外人を奴隸として賣買する風を生じ、キオス島は奴隸の中心市場となつた。又人口の都市集中も著しく、耕地の荒廢、無職者の増大も注目される。ペリクレスが盛に土木を起したのも、實は貧民救済の爲めであつたと云はれてゐる。」

(註二) 「ローマはカルタゴを滅してより、全く地中海の霸權を掌中に收め、地中海沿岸の地は殆ど全部ローマの領有に歸した。さうして此の領土擴大に伴つて大地主が輩出し、中にも政治の實權を握つて居た元老院議員階級がその最たるものであつた。此の外なほ新興階級たる騎士階級も擡頭して來た。彼等大地主は海外植民地の増大に従つて、葡萄、オリヴ等の栽培に投資し、その製品たる葡萄酒、オリヴ油等をイスパニヤ、ガリヤ等の屬州に輸出し、或は又土地の賃借によつて益々富を増大した。……さうして穀物の生産は、資本なき小農民や僻遠地の耕作者に委ねられたに過ぎない。かくてイタリアに葡萄、オリヴの栽培が盛となるに従ひ、農民の耕作は衰へざるを得ない。且つ東方征討の結果、從軍した農民兵は却つて土地を失ふものも多く、其の上征服地より多數の奴隸が輸入され、資本家は悦で彼等を使用した爲、農民の失業者は益々増加した。かくて彼等は借財の爲に土地を失ひ、或は土地を賣却して都市へ移住するを餘儀なくされ、都市の人口増加と共に、地方の農民は益々減少し、自由農民は漸次奴隸に轉落するに至つた。その結果、小地主たる中流階級は沒落し、大地主は膨脹し、政治上に於ても財

4) 文學博士大類仲著「西洋史新講」六五頁。

5) 同上、九八頁。

力の多寡に依て左右される寡頭政治に傾いた。即ちボエニ戰役以後急激に進展した資本主義の結果、富者益々肥え、貧者益々飢ゆる状態を現出した。<sup>(9)</sup>

## 第二項 中世物々交換・貨幣による交換・兼て資本主義の第一期工場

### 手工業時代即ち商業資本主義時代に於ける恐慌と失業

—— 地方經濟・都市經濟・市場制度經濟・手工業組合經濟・封建經濟における恐慌の特殊性と失業の特殊性 ——

此時代にありても、主とするところは尙自給自足であつて、補充的に交換が行はれたにすぎない。即ち地方的自給自足を目的とするから、大體論からすれば、家内經濟と同一基礎に立つと見られぬこともないけれども、消費以上のものを生産し交換するところの市場制度によりて、時と所とを定めて、都市の住民と附近農民との間に、工業用品と農産餘剰品との交換が行はれた。しかるに、僅かに消費者を相手とする直接交換の域を脱することが出来なかつたので、今日のごとき商業の形態はとつてゐない。茲に於ては生産物は、大體上、家内經濟と同様、消費財であるが、尙一部分は交換財となりて、生産經濟より消費經濟に移り、生産と消費とは若干分離するに至つた。只分離された両者が直接に結付くところに、此の時代の特色がある。<sup>(註一)</sup>

如斯、個人の經濟生活が他の經濟單位と若干交渉し、生産と消費とが若干分離するに至るや、自給自足經濟時代よりも、需給關係が複雑となることは勿論であるが、之と同時に此時代はまた正に中世封建社會（八世紀から中世末までに全歐洲を支配した封建制度は中世生活を代表する標語である）に相當するので、經濟外的原因就中内亂戰爭等の



政治的原因又は社會的原因によりて惹起された經濟生活の混亂を、恐慌原因の尤なるものと考へなくてはならない。従つて茲では、生産不足によつて起る場合が多かつた。此の點だけから言へば上古と同じいし、その發生も同様偶發的であつた。

尤も此の時代は、手工業者が財貨の生産と共に販賣をも合せ行つたため、獨立の企業としての商業は未だ原則として存在しなかつた（勿論例外はあるであらう。ことに外國來商品についてはさうであり、都市には貸付資本すら發生した位であつた）。そしてまた器具は既に生産資本の性質をもつてゐたが、生産原料は未だ資本としての性質を有つに至らなかつたので、商業資本だけが純粹の營利資本であつたため、販賣閉塞に伴ふ生産恐慌と云つた資本主義的恐慌はなくて、あるものは只商業恐慌に止まり、而も地域的にも産業的にも局部的であつた。<sup>6)</sup>

中世紀に於ては勿論又近世に於ても十八世紀の末までは、現在見るがごとき固有の失業問題はまだ起らなかつた。

中世の所謂暗黒時代に於ては、經濟は到る處にまだ農業的性格をとつてゐた。<sup>(註二)</sup> 状態は單純であり、小さく一目瞭然であつた。身分は殆ど世襲的であり、各人は自分の活動舞臺に這入つてゆかうと欲した。其上に、全經濟政策は古代におけるごとく中産階級の理想（中世社會の代表的階級は武士であつた）によつて支配され、各人は禮儀正しい、キリスト教的方法（中世前半の宗教支配を想へ）に於て生活を導き且つ糊口の資を探がした。即ち十世紀の末までは社會状態は封建制度によつて嚴格なる、傳統的序列に組織された。そして下から上、上から下へと保護された。<sup>(註三)</sup>

6) 拙著、資本主義と景氣循環、二六、二七頁。

又十一世紀から十六世紀の後半に至るまでは、失業は重大なる意味の弊害はなかつた。政治及經濟の指導國家は獨乙であつた。十五世紀（一四一〇）に入るまで勝進む東方への移民が行はれた。東方では二三の貧乏人を指令しうる人は土地と勞働とを發見することが出來た。農業が行はれるところでは、百姓の狀態は十五世紀まで殆ど到る處喜ばしかつた。<sup>(註四)</sup>貴族の地主への從屬は此時期から初めて有害な局面を表し出した。フランス、イギリスをはじめとして、獨乙も亦その例から洩れなかつた。イギリスに於ては十五世紀の半頃に始まり、耕作が飼羊に變つた。羊毛價格の昂騰は大面積に互る牧場經營を有利にし、ヘンリー八世の時までには五萬の農民が犠牲に供せられたと稱せられる。これらの有り餘つた人々は、主人のところへ避難するか都會へ出た。ドイツに於ては十六世紀のはじめ以來百姓の困窮は其の頂に達し、百姓一揆や農民戰爭に於て農民の血を流した。千年から千五百年迄の時が獨乙都市の最盛時であつて、同時に職人組合的手工業の盛時でもあつた。猶手工業は實は貧窮せる主人<sup>アイスタム</sup>及遺族と、徒弟<sup>レユリグ</sup>及職工<sup>グゼル</sup>とで組合<sup>ツェフト</sup>を結成した。遍歴せる、往々失業せる職工は謝禮<sup>グゼンク</sup>を以て身分相應な暮らしをした。

廣範圍の失業は、比較的近時即ち十六世紀から十九世紀にかけて既に近代資本主義へ移つてから、凡ての文化國家が齎したものである。田舎では、領主と農民との從屬關係は、尠くともドイツとフランスに於ては、益々加重された。三十年戰爭來、ドイツ農民階級は全く地上に横はつた。自由意思的に旅立つた農民や放逐された農民は都市に集つて、そこで浮浪民となり、脱線せる學生となり、職なき職工となつて、新なる都市的無產階級となつた。組合も亦此の衰頹時に於て之を保障するだけの力はなかつた。かゝる不幸なる發展に對する國家公權の政

策も頭初は最もきつい脅迫と懲罰とに限られた。害惡の源泉を塞ぎ、貧乏人を鞭つたり放逐したりするのみならず、救助して訓練して勞働せしめるまでには、永い歳月を闊した。十六世紀の二十年代以來、都市の救貧序列、(Armenordnungen)が定まり、大體に於て次の三重となる、即ち一は乞食することは罰せられる。二、小兒と少青年とは先づ學校に入らねばならぬ、そして學問を學び有用な人間に仕立られる。三、勞働能力ある貧乏人は原料と道具とが與へられ、それによつて自ら忠實なる勞働によつて衣食することが出来る。しかし都市の近くでは、國家がその義務を有ち、貧民は自ら元氣に働らいた。恰も重商主義が個人のあらゆる經濟的創意と責任とをお上の手に委任したごとく、貧乏の重荷もまた、國家や經濟政策の失敗といふので、國家が引受けた。イギリスのエリザベス女王の時から救貧法は、各國に發布され、もともと都市の秩序の思想であつたが、次第に繰返へされ且つ廣範圍に互つた。

(註一) 第一項、第二項、第三項、時代の區分別けは、歴史學的に見て餘りに雜然としてゐるかもしれぬ。しかし今は、單に恐慌の歴史性、失業の歴史性を檢索し、歴史的特徴をうかがひうれば足る。これは拙著「資本主義と景氣循環」の發展とみてもよい。尙これについては、本庄博士の經濟史の講義、並に「國家學辭典」中のクムプマンの「失業及失業保障」なる論文に負ふところ大である。尙西洋史一般の研究は、主として大類博士の「西洋史新講」やヘーゲルの「歴史哲學」に據り、特に恐慌についてはツガンの「英國恐慌史論」などを考慮に置いた。近くは谷口博士恐慌理論の研究も學ぶところが多かつた。

(註二) 「中世の經濟生活は農業が根本をなし、大體に於て自然經濟が行はれた、十世紀頃までは特に農業主義で、大地主の經營の下に小規模な工業が營まれ、商業も地方的性質のものが多く、市場の如きも宗教的祭式や寺院參拜等に伴つた幼稚なものであつた。又交通も封建的的地方割據のため發達しなかつた。たゞ海上にはカサセン商人が活動して、東方の物貨を賣らしたのみである。併し封建制度の高潮時に於ては、社會狀態の安定と共に交通も漸次發達し、古代の大交通路も復活され、それに沿ふて都市が擡頭して來た。……以上の如き經濟の新發展が起つたとは云へ、結局は中世に於ては近代の如き自由な發展は認めら

7) K. Kumpmann, „Arbeitslosigkeit und Arbeitslosenversicherung“ im H. D. S. 4. Aufl. I. Band, S. 792.

れない。封建制據の風は經濟界にも行はれて、各都市は自己の經濟區域を守つて他と自由に交易を試みず、自己の經濟的特權を維持するに努めた。蓋し十七世紀のマーカンテイズムを極めて小規模にした觀があるのである。要するに中世の商工業は「獨占」を以て特色とする、商業上の販路も互にそれを獨占することに努め、他の都市又他國の商人がそこに入り來ることを拒んだ、さうして各商業は商業組合の嚴重な統制の下に置かれたのである。又工業に在ても商業と同じく工業組合の支配が行はれて、同業者は各製造地に於ける同業者の組合に屬し、生産の種類、手段、分量など總べて組合の規定を守り、各自の任意行動は許されな<sup>8)</sup>い。

(註三)「封建 feodum は忠誠 fides と同類である。併し忠誠といふのは、この場合、不正による拘束性であつて、その關係たるや、何か正當なことを目的にしてゐるが、しかし其の内容に同様に非常な不正を有する。何となれば、臣下の忠誠は普通者即ち國家に對する義務ではなく、偶然性・恣意・暴力に歸着するところの私的義務だからである。」<sup>9)</sup>

(註四)「殊にイギリスの農民などは他に比して良好の状態にあり、又フランスの農民も中世末期には小作人となる者が多く、生活狀態も漸次改善されて來た。たゞ此の如く農民生活が稍良好になると、起つて來る問題は社會的不平等に對する不平である。中世末期十四世紀頃には此の不平の聲が農民の間に屢聞かれ、それが政治的不安や經濟的不幸と結びついて爆發した。かくて中世末期には英佛獨等の諸國に農民一揆の發生を見ることが出来る。さうして其等の一揆は單に經濟的意義をもつ社會運動のみではなく、そこには宗教的信念が強く働いてゐた。社會の不平等や諸弊害の廓清、いづれも宗教的意味をもたない運動はなかつた。是中世末期の社會運動の特色である。」<sup>10)</sup>

## 第二節 近世間接交換時代、賣買又は工業資本・金融資本主義

### 時代における恐慌と失業

——國民經濟・世界經濟時代における恐慌の特殊性と失業の特殊性——

中世末期は政治的には君主主義を、經濟的には資本主義を生み出した。財貨の取引が國內的にも國外的にも擴大されて交通經濟時代に入り、販賣といふことが重要な意義をもつに至り、商業は工業より分離して獨立の企業

恐慌の歴史性と失業の歴史性

第五十一卷

九〇九

第六號

六五

8) 大類博士、西洋史新講、二五三、二五四頁。

9) Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Reclam, S. 468.

10) 大類博士、西洋史新講、二五九頁。

となるに至るや、生産者と消費者との間の需給の適合は商人によつて遂行され、生産者と消費者とが本質的には全く別人となるに至つて、間接交換時代に入る。加之、商人は單に需給の調節に終始せずして、營利の爲に商業を營むや、生産も亦營利のための生産となりて、資本主義經濟發生して、財貨循環の現象を呈する。

かくて、今や、購買力を追うて、一人は全體を目當てに、全體は一人を目當てに、の豫想生産たる市場生産又は商品生産を行ふを以て、生産と消費との間に均衡を見ざることを以て特色とする。又流通地域が世界的となり、所謂世界經濟時代を現出するや、生産は單に物價の變動を以て其生産の標準となすために、需要と供給との一致がしばしば不精確となる傾きあることは如何ともしがたい。且又生産方法が進歩し、生産力が擴大した結果大量生産時代を現出し、益々固定的設備の擴大を促し、ために所謂過剰生産時代を結果し、低物價時代を招來する因となる。剩へ經濟界が信用經濟時代と云はるゝごとく、一片の信用の上に取引が決行さるゝために、一局部の破綻また全局部の崩壊となる。<sup>11)</sup>

「個々の集團が殆ど孤立してゐた自然自足經濟の時代には、産業生活の一部門に於ける恐慌の突發は、他の凡てに影響することはありうべからざることであつた。或一團の完全なる滅亡ですら殆ど他に影響しなかつた。都市手工業社會に於ては、各個企業間の紐帶は、比較的發展したけれども、個々の場合に於ては、比較的少數の企業に多少の關係があるのみであつて、經濟生活の攪亂は、さう廣くは擴がらなかつた。かゝる社會構成が、低級の有機體に比較されうるならば、高度に發達した分業を有する資本家的社會は、この點に於て、高度に發達した有機體と比較しうる。もし人體の一部が傷害されたら、全身が恐慌を蒙り、傷害部より最も離れた器官でさへ打撃

11) 拙著、資本主義と景氣循環、二七、二八頁。

を受ける。反之、生活機能が身體の各部に大に分化してゐない水蛭にとりては、その身體の或部分に對する非常に重大なる傷害でさへ、他の部分にとりては、ほんの僅かしか影響を及ぼさない。<sup>12)</sup>」

かくのごとく、生産と消費との投合は、原則として絶望である。而も、古代及中世の恐慌が主として經濟外的原因によりて發生したのに反して、資本主義の恐慌は、多く生産過剩・物價暴落・投機の失敗・信用の破壊等經濟的原因によつて發生するところに特徴がある。勿論恐慌は今日とても、經濟外的原因によつて生ずる場合も亦極めて多くはあるが、大體論からすれば、經濟外的原因による恐慌は昔に多く今に少く、今日の恐慌は主として組織自體より生ずる内生的のものであつて、純然たる外生的のものに終始するものは稀であると言つてよい。のみならず、近世資本主義時代の恐慌は、周期的に而かも規則的に發生した事實あり、景氣循環（即ち單なる交替にあらず）の而かも其一相（段階）として姿をあらはしたことが特色である。そして又此事實は、論理的にも或程度迄説明しうる。<sup>13)</sup>

總じて言へば、一八七〇年以前の古き恐慌は、偶然的であり、雑多な性質を帯びてゐたに反し、一八七〇年以後の新たな恐慌は、典型的な特色を以てあらはれ共通の性質を帯びる。經濟生活の急激な攪亂といふ一般的な意味における恐慌即ち廣義の恐慌は、歴史上當然まことに雑多なものがある。殊に、(A) 大きい經濟的變革若くは新な制度及事情と關聯して起る、例へば(1)貨幣經濟の發達は、鑄貨制度や紙幣發行の操縱の誤りにもとづく無數の恐慌を惹起した。更に恐慌は(2)信用、就中恐らくは國家公債或は手形のごとき特殊の信用要具の濫用によりて生じた。(3)取引所や常時起りつゝあつた株式制度は、最初投機にひどく濫用せられ、繰返へし繰返へし烈しい恐慌を

12) Bogdanov, Short Course of Economics, 經濟科學概論、四三七頁。

13) 拙著、資本主義と景氣循環、二八頁。

もたらした。(4)西歐羅巴の商業領域が全世界に擴大したことは、實業界がその活動の新たな諸條件を正しく把握して之等に順應する前に多くの恐慌を惹起せざるを得なかつた。(5)歐羅巴から植民地への輸出は、他の大陸の欲望と購買能力に關して全く驚くべきほどの認識不足なのが特徴であつた。此有様は、通信制度の遅緩と結びついて、十八世紀並に十九世紀前半に於ける多數の大なる商業恐慌に對して責任がある。(6)植民地から歐羅巴へ向ふ商品に對する輸入條件の變革も亦恐慌を惹起した。就中十九世紀末の歐羅巴農業恐慌はその最も重要著名なるものである。(7)生産技術の近代的大變革は、重大な恐慌なしには實現され得なかつたといふことは白明の理である。特に手仕事から機械仕事へ移行行く多くの諸々の職業に於て悲慘であつた。(B)以上の諸事情と並んで、多數のより小さき・より偶然的なる擾亂が、恐慌原因として問題となる。之等は主として偶然的に商品が缺乏するか過剰であるとかに基く。例へば、(1)ひどい凶作又は豐作、(2)工業を休止せしむるやうな原料品の缺乏、(3)在荷商品を賣捌くことの出来ないやうにするやうな流行の變遷、(4)等々、に於て明かにあらはれる。(C)經濟恐慌の一般的原因として最後に戰爭を挙げねばならぬ。茲に掲げた廣義に於ける恐慌のごとく極端に變化する種々様々の現象について一般的・統一的な理論を打立てることは無論不可能である。従つて景氣理論が研究せんとするところのものは、經濟生活に於て一般に可能な諸擾亂の總體ではなくして、特に大體上一八七〇年工業資本主義の始期以來(資本主義の始期を何年に求めるかは區々である。カッセルは一八七〇年以後となし、シュビイトホフは英國は一八二〇年以後、獨乙は一八四〇年以後とし、ボクダノフは十九世紀の第一期に始まるとしてゐる。産業革命が英國では一七六〇年頃より行はれ、フランスはナポレオン戰爭後のことであり、ドイツは一八四五年頃に始まつて一八七〇年に完成してゐる)典型的な特

色を以て明るみへ出て來たところの・經濟生活の一般的な上昇並に下降運動である。<sup>14)</sup> 蓋し一八七〇年以來はじめて、一體として考察の對象とすることが一般に可能なほど統一ある性質をもつた世界經濟が發生し、此年來はじめて、古き經濟形式が一般的に且決定的に克服されて、近代の交換經濟及分業的生産が之に代り、近代的生産技術及運輸技術も亦造り上げられ、遂に一定の古き恐慌形態及恐慌原因が大體に於て克服されて、近代的な型の恐慌と上昇期下降期とが一定の特色を以て現はれるやうになつたからである。<sup>15)</sup>

繰返へして言へば、此時以來、古き恐慌原因の多くが大體に於て作用しなくなつた。即ち古き恐慌を大部分支配したところの偶然的な事情はたえず後方に押しやられ、恐慌は言はゞ共通の性質をもつに至り、統一的に現はれるのを常とする經濟生活の波を決定するところの同一原因より生ずるに至つた。十九世紀の經濟史を注意深く觀察するならば、恐慌現象の性質が漸次變化してゐることを見逃せないであらう。七十年代に始めて此變化は完成されて、新たな統一型の恐慌及景氣變動が明かに出現した。

然らば資本主義時代に於ける失業の特殊性如何。恐慌が古き恐慌より新しき恐慌へ移りゆけるごとく、失業も亦「古き失業」より「新しき失業」へ移り行つたと見ることが出来る。偶然的な部分的な暫定的な失業が、規則的な必然的な一般的な恒久的な失業と變化して行つた、と一應言ふことが出来るであらう。以下更に立入つて史實に従つて這間の事情をうかゞふことにする。

振返へつて考ふれば、十八世紀の終及十九世紀の始めまでに、經濟的領域は思想的にも實際的にも凡ゆる方面が而も十分に改造されてゐる。重商主義思想は經濟的自由の思想によつて打碎かれ、國家的指導は無限の自治と

14) G. Cassel, Theoretische Sozialökonomie, 5 Aufl. S. 79, 80.

15) S. 479.



いふ命題によつてなされた。人は正當に自由競争によつて凡ての經濟力を刺戟するから、凡ての社會問題の理想的解決を自らするやう熱望した。經濟的進歩即ち福祉増進は勞働力を以前よりも活動的ならしめた。茲に於て勞働者は、今や特權・後見・拔擢によつてでなしに、又農民の從屬關係や職人組合的強制によつて妨げられるでもなく、社會的指導者に昇り且自ら運命を定める機會を有つこととなつた。その時に尙職なくしてゐた人々は、無能力者か馬鹿かで、彼等は因果應報自ら運命に甘んぜねばならず、救助を受けなかつた。自由なる國家に於ても亦謂はれなき貧乏人と失業とが支配しうる。しかし其等の原因は専ら過度の人口増加に歸因し、(マルサスを想へ)而も畢竟それも下級階級の責任であるとされた。

かうした自由主義理論家の希望を無殘に踏みにじつて、十九世紀及廿世紀の事實が生じた。それは即ち自由主義及資本主義の時代は同時に「失業の時代」でもあり、而も巨大なる「謂れなき」、無産階級の失業を醸し出した、と云ふことである。

この説明は現實の經濟生活の變動から分る。自由主義は實に自由をもたらし、職人的組合の解體、農民の解放、自由競争、營業の自由、移轉の自由となつてあらはれた。それは、新なる交通手段によつて容易にされた。そして自由の主義は、強力なる、まだ完結してゐない「産業化」或は「工業化」の過程を行はしめ、即ち工業及商業を押し進め、農業及手工業を落伍せしめた。工業には、一方に企業者、他方に勞働者と云つた二つの階級に對立して深き溝をつくつた。しかし勞働者の運命を決定的ならしめたものは、近代機械による新技術である。機械は、勞働者の敵であり、あらゆる困窮の原因である、と今や一般に思はれるやうになつた。常に機械は多くの勞働者を

解雇すると、大衆は賃銀を増加する。かゝる産業豫備軍の存在は、しかし企業者をして労働者に對する決定的優越性を與へ、無産階級の生活條件なり労働條件なりを絶えず悪化する。「機械は労働者を驅逐する。機械は賃銀を引下げる。機械は休業を加重する」(シスモンディ)。世紀の進行中に、資本主義的革命は産業の中に絶えず荒れ狂うてゐた。小規模工業(手工業・家内工業)の代りに、工場工業が起り、工場工業は又もや小企業より大企業へ、大企業は巨大企業へと進んだ。あらゆる方面に合理化の強力なる衝動が起り、労働節約の要求が起つた。それによつて少くとも初めは、過渡期に於ては、たえず失業を繰返へし且つ増加して行つた。間もなく、即ち約一八八〇年代より、小規模營業も存在理由を増し來り、其上、労働節約も長く、續く中には、無産階級も労働の機會を増し且向上せしめた。

しかし労働不足は資本主義制度の反對者には不吉なる作用として主張されたのみならず、仕事の不安定と考へられた。仕事が不安定であれば、労働者の生活を震撼し無産者階級の地位を益々悪くするものと考へられた。資本主義は發作的に膨脹し收縮した、人はそれを「景氣變動」と呼ぶ。高景氣への上昇は間もなく崩壊する、それを「恐慌」と呼ぶ。事實上十九世紀の恐慌は本質的に新なる性質をもつてあらはれた。恐慌は、それ以前に於ては勿論人間が地上に經濟生活を営む限り、生じた。しかし前資本主義的世紀における恐慌は不規則的であり、偶然的であつて、空間的にも小地域に限られた、例へば家内經濟、都市經濟、地域的經濟のごとく。そして農作物の變動にもとづく農業恐慌が主であつた。しかるに十九世紀の恐慌は一定の規則性を以てあらはれる。社會主義者は之を産業恐慌循環法則(Gesetz des industriellen Krisenzyklus)と呼ぶ。之は空間的に國民經濟全面に互り、時として

は數國又は全世界經濟に及ぶことがある。そして又農作物恐慌であるよりも寧ろ工業・商業・交通・貨幣制度・銀行制度・取引所制度から起るところの經濟變動形態であるやうになつた。恐慌の原因として人のかゝげるは、いろいろあつた。多くの批判者たちは過少消費、大衆の無産、生産過剰等々が規則的に循環を破壊するものだとした。之に對してマルクス及その弟子達は、資本主義經濟の無計畫性に原因を歸した。手工業者が知られた顧客に對して仕事をしたのに、資本主義的企業家は豫測しがたき世界市場に對して殆ど無闇に生産をする。生産者の一般的競争は時々刻々彼等の多數を奈落の底へ陥込み、結局は全資本主義的經濟秩序を呑込んでしまふ。

計畫經濟、即ち「勞働の組織」(Organisation der Arbeit)は、だから社會主義者の閑聲であり、挑戦であり、綱領である。

近代經濟に於ける永久的大衆失業 (Permanente Massenarbeitslosigkeit) は、資本主義的經濟秩序の眞正癌であると云ふことが出来る。<sup>16)</sup>

(註) 失業の變動が景氣循環期に依存すること、從つて規則的であることの實證は、便宜上、ツガンの次の統計を借りることゝした。(因みに、これによると、失業の變動は輸出の變動とは正反對の方向をとつてゐる。今はこれには立入らない。)(次表)

此の「割合」は勞働組合員たる失業者にして而も組合の扶助金を受ける者の割合である。しかるに、失業手當を受ける勞働組合員の割合は必ずしも「眞」の失業者數を示すものではない。何となれば、組織されざる勞働大衆の失業者については知る由もなく、又組合の金で扶助金を出すとは限らぬからである。それだけの注意を以て次表は見るべきである。因みに當時勞働組合員たるものは全勞働者の二割五分にすぎずと云はれ、組合員にして扶助金を受ける者も五割から八割位であつたらうと云はれてゐる。

16) H. D. S. S. 792, 793.

17) ツガン、英國恐慌史論、四五五頁參照。

聯合王國輸出額(百萬磅)	勞失組合者の中割の			年
	建築工業	印刷製本工業	機械・造船・金屬・工業	
222	5.9	2.9	9.4	.....1887
235	5.5	2.4	6.0	.....1888
249	3.3	2.5	2.3	.....1889
264	2.2	2.2	2.2	.....1890
247	2.5	4.0	4.1	.....1891
227	3.0	4.3	7.7	.....1892
218	3.3	4.1	11.4	.....1893
216	4.1	5.6	11.2	.....1894
226	3.8	4.9	8.2	.....1895
240	1.8	4.3	4.2	.....1896
234	1.6	3.9	4.8	.....1897
233	1.3	3.7	4.0	.....1898
255	1.5	3.9	2.4	.....1899
291	2.6	4.2	2.6	.....1900
280	3.9	4.5	3.8	.....1901
283	4.0	4.6	5.5	.....1902
290	4.4	4.4	6.6	.....1903
300	7.3	4.7	8.4	.....1904
329	8.0	5.1	6.6	.....1905
375	6.9	4.5	4.1	.....1906
426	7.3	4.3	4.9	.....1907
377	11.6	5.5	12.5	.....1908
378	11.7	5.6	13.0	.....1909
430	8.3	4.9	6.8	.....1910

### 第三節 組織された經濟における恐慌と失業

——組織された資本主義經濟並に社會的に組織された社會(社會主義社會經濟)・共產主義經濟又は全體主義經濟における恐慌の特殊性と失業の特殊性——

資本主義經濟に頻繁に生ずる恐慌の主たる原因を、私有財産制度と、従つて生ずる自由競争とに、一言以て之を蔽へば資本主義經濟の無計畫性に歸する社會主義者は、私有財産制度を撤廢して共有財産制となし、個人的自由競争をやめて社會的共同生産とせば、生産消費間に平衡を失することなく、従つておのづから恐慌も絶滅するであらうと云ふ。勿論其の根柢には、無政府的生産と競争自由の廢止と制限は生産統制の第一歩であるとなすがそれすら資本主義の内部に於ては不可能であるとの諦めがある。かくて、資本主義社會に於て恐慌を絶滅せんとする考へは全然空想的であるとし、恐慌即ち産業恐慌として知らるゝ一般的過剰生産は、資本主義制度の根本的

微より生ずるから、資本主義制度と共にのみ消滅すると説く。そして利潤ではなくして、全社會の要求を最も満足させる・社會的に組織された生産のみが、即ち大衆の購買力の不足なき社會、従つて階級のない社會のみが恐慌を廢滅しうると言ふ。

勿論、今日のソヴェート・ロシアの經濟計畫による組織された生産は、周圍の諸國の全てが資本主義國であるといふ、或は尠くとも反社會主義國（多少とも此のごろずれ出してはゐるが）であるといふ制約の下に在りて、純粹に新なる制度を貫きとほしえざる外的事情があるから、直ちに之を以て計畫經濟の本質について語りえないのであるけれども、資本主義的恐慌——生産消費の不均衡・生産過剰・ストック・資本固定・金融逼迫・信用破壊・財界混亂・恐慌——が、非常な程度に迄緩和されたこと又は事實らしい。平等（勞働義務・分配等）を強制する權力が生産力を大ならしむる槓杆たる・共產主義の第一階梯たる社會主義に於てすら然り。まして、一度び生産力が發展しきれば、早や「平等の原則」に代はるものは、「各人はその能力に應じてその欲望に従つて」であり、「平等を強制する權力」に代はるものが、「必然の王國から目的の王國」であるならば、正に願はしかるべきことでなければならぬ。しかしながら、「自由の王國」は成員が眞に自覺した曉にのみ別達しうる理想の社會である。<sup>18)</sup>

又所謂全體主義的經濟新秩序論は、恐慌なき或は「失業なき」設計論を打樹てゐる。（獨逸フランク經濟相あたりのニュースを想へ）うれしいことである。しかるに、恐慌は失業は、事實の問題である。此の事實を何處まで思想と計畫の力で押しやりうるかが懸けられた謎である。たゞ一言これだけの消極論を連ねておかう。即ち世界が全て全體主義國家群となれば兎に角、その一角に、而も或る有力なる資本主義國家群がある時、および、所謂全體主義國家の實相が依然資本主義的機構を根本に於て改めざる時は、單なる「希望」に終るか、希望に「近き」程度の問題として泣寝入りさせらるゝであらう、といふことである。

18) 拙著、資本主義と景氣循環、三〇、三一頁。

19) 高田博士「經濟に於ける統制と體制」（經濟論叢、第五十一卷第三號、五一頁）参照。

全體主義國家、社會主義國家に在りては、尠くとも「資本主義的」恐慌は緩和（事實に於ては「絶滅」といふ語を用ひんとして用ひざるをなげく）されるであらうことは、事實も亦證明するが、それにしても尙、經濟外的原因より生ずる恐慌は、依然として残る。天變地異による恐慌然り。戰爭による恐慌然り。天變地異による自然的事情に基く恐慌は致方のない運命であるであらうし、世界から戰爭が亡くならぬ限り、戰爭景氣戰後恐慌は依然失業を産みつゞけるであらう。

人はよく戰時經濟下における「完全雇傭」の喜ばしき状態が永遠につゞくものと考へる。そしてまた現下戰時景氣を萬年景氣のごとく見、恐慌の到來を夢みようともしない人が多い。事ほど左様に現實に執してゐる。と共に「希望」を托してゐる。果して然るか。藉すに數年の時を以てすれば分るであらう。<sup>(註)</sup>

苟くも人間の營む經濟生活から恐慌と失業とが全然亡くなる日は一場の夢物語としてのみあるであらう。尠くとも私はさう信ずる。經濟恐慌史と世界史の研究は私にそのやうな結論を與へてしまつた。

のみならず、經濟の「計畫」とても、それが大がかりであればあるだけ、思はれたるだけの結果を見ることが出来るかどうかもまた、甚だしき疑問ではある。

勿論、一時的には恐慌を喰止めることが出来るであらう。しかし、問題は一時的ではない。畢竟社會主義は「失業者の世界觀」であり、大がかりな「失業靈藥」に外ならない。

<sup>(註)</sup>「この版は、今や産業の、一般的繁榮の時期に世に出されるのである。しかし私の説く理論から出發すれば、近い中に恐慌の來るは避け難いことがたやすく知り得られる。政治的破局例へば歐洲戰爭の如きものによつて早められないとすれば、恐慌は恐らく一九一四——一六年頃に起るであらう。私は二年前ロシア版の中でこの意見を發表した。そして極く最近フランスの恐慌問題研究委員會も殆んど同様な觀測をしてゐる。

故に、現在の輝かしい状態に幻惑されて、不可避的に來る時期を見失つてはならない。<sup>(20)</sup>（國點桑原）とは、一九一二年十一月二十日セント・ペテルスブルグにて認めたツガンの、「英國に於ける産業恐慌」の序文に在る言葉である。

20) Les Crises industrielles en Angleterre, par Michel Tougan-Baranowsky. 鐵本譯「英國恐慌史論」參照。